

プラウトゥス『バッキス姉妹』における策略と成功

藤井琢磨・高橋宏幸⁽¹⁾

1. 視点と問題

プラウトゥスの喜劇『バッキス姉妹』(*Bacchides*)は冒頭に欠損部分があるが、その部分にも断片が伝存するので、全体の把握に支障はなく、おおよその筋は次のようなものである。

アテーナイの若者ムネーシロクスは父親ニーコプールの貸付金回収のために遣わされたエペスで遊女のバッキス妹に恋する。しかし、彼女は軍人クレオマクスによって1年の年季奉公のために身請けされ、アテーナイへ送られてしまったので、ムネーシロクスは彼の親友ピストクレールスに手紙を出し、彼女を見つけて自由にしてやってくれ、と頼んだ。アテーナイに着いたバッキス妹は双子の姉と再会し、その家に身を置くことになるが、それをピストクレールスが見つかる。

以上が、幕開き前の設定と断片から知られる劇冒頭の展開で、続いてバッキス姉妹は相談のうえ、姉がピストクレールスを誘惑し、自分たちの都合のよいように利用しにかかる。そこへムネーシロクスの奴隷クリューサルスが一足先にエペスから戻り、バッキス妹が見つかっていることを知ると、あとは身請け金の工面とばかり、まったくの作り話でニーコプールのエペスに出発させ、そのすきに取り立ててきた金の一部を流しようという策略に出る。これにニーコプールのまんまと乗せられかけたが、そこへ帰ってきたムネーシロクスがピストクレールスの教育係の奴隷リュードウスから、ピストクレールスがバッキスに熱々だと聞かされ、勘違いする。裏切られたと思い、父親ニーコプールの事の次第を打ち明けてクリューサルスの策略への赦しを取りつけるとともに金を返してしまう。

ムネーシロクスの勘違いが解けたあと、彼の失敗にもめげず、クリューサルスは第2の策略を繰り出す。まず、ムネーシロクスにニーコプールの宛で、「クリューサルスが金をだまし取ろうとしているので、縛り上げて見張るように、という内容の手紙を書かせてから、若者二人に姉妹のところで合図のあるまでずっと酒を飲んでいるように言う。その手紙を見たニーコプールのクリューサルスを縛り上げると、クリューサルスは姉妹の家の中を見せる。そこへ軍人クレオマクスが登場、バッキス妹とムネーシロクスが戯れる様子に憤慨する。

この機を捉えて、クリューサルスは、あれはバッキス妹の旦那だからと言って、ニーコプールスからムネーシロクスのために和解金として（身請け金相当の）ピリップス金貨 200 枚を払う約束を取りつける。そのうえでさらに、ムネーシロクスに、後悔しているので女に手切れ金として渡すと誓約したピリップス金貨 200 枚を、と無心する 2 通目の手紙を書かせると、ニーコプールスはこれも承知する。

金を渡してからニーコプールスは軍人から話を聞いてだまされたことに気づき、ピストクレールスの父親ピロクセヌスとともにバッキス姉妹の家へ行くが、姉妹の色香にあえなく籠絡されてしまい、幕となる。

このような筋からすぐに了解されるように『バッキス姉妹』は奴隷クリューサルスによる策略が劇の中心をなしている。この点で興味深いのは、プラウトゥスが翻案のモデルとしたメナンドロスの作品は『二度のだまし』(*Dis Exapaton*)と題されていたことである。クリューサルスのような「狡猾な奴隷」(*servus callidus*)が活躍する劇展開はプラウトゥスの特色とされている。ところが、この場合には、そうした劇展開を示しているメナンドロスの原作の題名をプラウトゥスはわざわざ『バッキス姉妹』に変更したことになる。

関連して注目されるのは、クリューサルスが最終幕を前に次のせりふとともに退場し、以後は再び登場することなく、父親二人を手懐ける仕上げの役回りをバッキス姉妹に譲ってしまうことである。

hoc est incepta efficere pulchre: ueluti mi
euenit ut ouans praeda onustus cederem;
salute nostra atque urbe capta per dolum
domum reduco iam integrum omnem exercitum.
sed, spectatores, uos nunc ne miremini
quod non triumpho: peruolgatum est, nil moror;
uerum tamen accipientur mulso milites.
nunc hanc praedam omnem iam ad quaestorem deferam. (1068-75)⁽²⁾

これで作戦は見事に完了。われながら、戦利品を担いで凱旋行進するような出来栄えだ。味方は安泰、都は策略で陥落、さあ、全軍を無傷で帰還させるぞ。でも、観客のみなさん、どうかびつくりなさらないでください。私は凱旋式をしません。そんなの月並みですから、どうでもいいんです。ただ、兵士たちは甘い酒でもてなしてやります。さっそく、この戦利品をそっくり財

務官に届けに参りましょう。

これに先立つ場面でクリューサルはこれから仕掛けようとする自分の策略をトロイア攻略になぞらえる長広舌を揮っていた(925-78; cf. 987f.)ので、それを果たした暁にこれに見合う凱歌の場面を彼自身が演じないことがまず目を引く。題名において『二度のだまし』が『バッキス姉妹』へ変更されたのと呼応するかのように、劇の締めくくりも「狡猾な奴隷」ではなく、遊女姉妹がスポットライトを浴びているのである。そのうえでさらに興味深いのは、そうした一種のアンティクライマックスについて、それが観客に向けて語られるとともに、その意図が陳腐な常套場面を避けることにあると言明されること、つまり、登場人物が舞台の枠外に出て劇展開そのものをせりふにして話すという、いわゆるメタ演劇的手法が取られていることである。

このせりふについてのこれまでの解釈は「凱旋式が月並み」と言われることに焦点を当て、大きく分けて二つの見方がある。その第一は当時、現実の凱旋式挙行が頻繁になったことを踏まえるとするもので、この解釈を提唱した Ritschl はそれをもとに作品の上演年代を推定しようとした³⁾。それに対して Fraenkel は、策略の成功を凱旋にたとえることが常套化していたことを指摘しながら、言及は現実の慣行ではなく、常套の陳腐さに向けられているとする⁴⁾。これが第二の見方で、月並みを避けると言いながら、そう言うことでやはり凱旋を口にするとところに滑稽味を認めようとする。

本稿の立場は第二の見方に近い。しかし、上述のように、このせりふは、それとともに劇の主人公と目される登場人物が完全に退場し、その見せ場が消え去る契機をなしている。その点で、『バッキス姉妹』への題名変更とも関連して、作品全体の構想に及ぶ意味が考えられてもよいように思われる。ここで言われる「月並み」は、現実のものであれ、メタファーであれ、単に凱旋式のみに向けられているのではなく、そうした題材を舞台上にのせる役回り、つまり、「狡猾な奴隷」に対してのものでもあるのではないか、というのが本稿の見通しである。

この観点から参照すべきだと思われるのは『プセウドルス』に見られる同様のモチーフと展開である。作品全般においても『バッキス姉妹』と『プセウドルス』には、身請け金の工面に成功する奴隷の活躍という筋、策略に手紙が使われる道具立て、父親が奴隷を信用しないというモチーフなど、劇作の重要なところで共通点が多いが、「月並み」に関しても際立った類似が認められる。ク

リューサルスと同じく狡猾な奴隷の典型であるプセウドルスはこれから策略を仕掛けようとするとき、

qui in scaenam prouenit,
nouo módo nouom aliquid inuentum adferre addeceat;
si id facere nequeat, det locum illi qui queat. (568-70)

舞台に登場する人間はいままでにないやり方でいままでにない工夫をもってこなくちゃならん。それができないのなら、できる人間に出番を譲るべきだ。

と言う。その一方で、結末場面の直前には、彼に金を奪われた年寄りシモーが次のように語り、結局、渡すはずの金の半額をプセウドルスから返してもらうことになる。やはりアンティクライマックスとも見える結末で、その点も『パキス姉妹』と共通する。

nunc mihi certum est alio pacto Pseudolo insidias dare,
quam in aliis comoediis fit, ubi cum stimulis aut flagris
insidiantur: at ego iam intus promam uiginti minas,
quas promisi si effecisset; obuiam ei ultro deferam.
nimis illic mortalis doctus, nimis uorsutus, nimis malus;
superauit dolum Troianum atque Vlixem Pseudolus.
nunc ibo intro, argentum promam, Pseudolo insidias dabo. (1239-45)

さあ、わしは決めたぞ。ひと味違うやり方でプセウドルスに不意打ちを食わせてやるんだ。他の喜劇だったら、突き棒や鞭を持って不意打ちするところだが、わしはこれから中に入って 20 ミナを取り出ししてくる。あいつがうまくやったら、やると約束してあった金だ。これをあいつに会ったら、こっちから渡してやる。舌を巻くよ、あの男の賢さ、機転、悪さには。トロイア陥落の策略とウリクセースもプセウドルスにはかなわない。さあ、中へ入って、金を取ってこよう。プセウドルスに不意打ちを食わずんだ。

この筋の展開の問題については高橋が別に取り上げ、「芝居」がプセウドルスの策略のメタファーとして表現に与っていること、「芝居」は月並みであってはならない一方、観客は月並みでないやり方に用心するよう言われていることに着目し、見事な成功を飾った主人公が最終幕で躓きを見せるのは観客の意表を突

く演出として解釈した⁶⁾。『バッキス姉妹』でも、そのように芝居そのものが強く意識され、月並みを排する劇作意図がクリューサルスのせりふに示されたのではないかと推量することはまったく見当はずれではあるまい。

そこで、以下には、まず「狡猾な奴隷」としてのクリューサルスについて、次いで題名とされたバッキス姉妹について、それぞれの描かれ方を観察し、観察された対応や対比の検討を通して、上述のクリューサルス退場の問題から作品全体の見直しを図ることとする。

2. 「狡猾な奴隷」クリューサルス

類型的な登場人物として「狡猾な奴隷」が演じるお決まりの役回りの一つは得意の口八丁と機転を働かせて彼の仕える主人のために遊女などの身請け金を工面することである。『バッキス姉妹』のクリューサルスは、『プセウドルス』(*Pseudolus*)におけるプセウドルスや『エピディクス』(*Epidicus*)におけるエピディクスなどと並び、その典型と言える。その一方、クリューサルスの特色はまさにその金の工面を自分の役割として他に例を見ないほど強調する点にあるように思われる。本章では、この点を観察する。

クリューサルスはエペススから戻ったところとして登場し、ピストクレールスとの話でバッキス妹が見つかったことを確かめると、

edepol, Mnesiloche, ut hanc rem natam intellego,
quod ames paratumst: quod des inuentost opus. (218-19)

これはまったく、ムネーシロクスよ、こういうことになってるってことは、恋のお相手は用意済みなので、払いの工面がいるってことです。

と独り言を言ったあと、さらに、ピストクレールスとのやりとりで、

CH. nam istoc fortasse aurost opu! PI. Philippeo quidem.
CH. atque eo fortasse iam opust. PI. immo etiam prius:
nam iam huc adueniet miles. CH. et miles quidem?
PI. qui de amittenda Bacchide aurum hic exigit.
CH. ueniat quando uolt, atque ita ne mihi sit morae.
domist: non metuo nec quouiquam supplico,
dum quidem hoc ualebit pectus perfidia meum. (220-26)

ク：ですから、たぶん、金子が入り用ですね。ピ：そう、ピリッパス金貨だ。
ク：それも、たぶん、すぐに入り用ですね。ピ：すぐになんてものじゃない。
だって、すぐにここへ軍人が来るんだ。ク：軍人もですか。
ピ：そいつがバックスを手放し、代わりに金子を取り立てるんだ。
ク：来るがいいや、いつなりとね。そんなに私を待たせちゃいけない。用意
はあるんだ。怖くもないし、誰にすぎりもしませんよ。この胸から誑かしの
力が出るかぎりはね。

というように、金子が必要なことを繰り返す(*quod des inuentost opus 219, aurost
opu' 220, eo iam opust 221*)とともに、その算段の成否が彼の策略(*perfidia 226*)次
第であることを述べる。そして、ピストクレールスの退場したあと、その場を

*negotium hoc ad me adtinet aurarium.
mille et ducentos Philippum adtulimus aureos
Epheso, quos hospes debuit nostro seni.
inde ego hodie aliquam machinabor machinam,
unde aurum efficiam amanti erili filio.*

(229-33)

俺の出番はこういう金子の面倒を見るときだ。1200枚のピリッパス金貨を俺
はエペスから運んできた。客人がうちの年寄り旦那に借りてた金だ。そこ
から俺は今日なにか絡繰りを繰り出すことにしよう。それで若旦那の恋のた
めに金子を仕立ててやるんだ。

という言葉で締めくくる。一連のせりふはクリューサルスの「狡猾な奴隷」と
しての存在意義が金の工面にあることを強調している。この強調が、メナンド
ロスではなく、プラウトゥスによるものであることは *aurarium*(229)という語の
使用からも窺える。Barsbyが注記する⁶⁾ように、「主計官」(*aerarius*)というロー
マの制度を踏まえての表現と考えられるからである。

このような金の工面をクリューサルスの本領として示そうとするプラウト
ゥスの意図は次の場面で明瞭になる。登場してきたニーコプールスを見て、ク
リューサルスは策略を仕掛けるべく、

*hau dormitandumst: opus est chryso Chrysalo.
adibo hunc, quem quidem ego hodie faciam hic arietem*

Phrxi, itaque tondebo auro usque ad uiuam cutem. (240-42)

居眠りしてる場合じゃない。入り用なんだ、クリューサルスにはゴールドが。さあ、行くぞ。こいつを俺は今日この場で羊にする。ブリクススの羊から黄金の毛を刈って生皮が見えるまでにしてやるんだ。

と、みずからを鼓舞しつつ宣言するからである。メナンドロス『二度のだまし』で策略を実行する奴隷の名はシュロスであったことが断片から分かっている(τί οὖν ὁ Σύρος ἐβούλετο; 58)。したがって、クリューサルス(Chrysalus)という名前はプラウトゥスによる翻案の一部である。加えて、この名前は他の現存作品では用いられていないので、この作品のために特別に作り出されたことが推測される。そして、その特別な意味が「黄金・金子」(chrysos)との関連づけにあることは引用のせりふから明らかである。

しかも、この意味連関の提示は一度だけで終わらない。最初の策略がムネーシロクスの勘違いのために水泡に帰したあと、彼とピストクレールスが困り果てているところへ、

Pl. tuam copiam eccam Chrysalum uideo. (639)

ピ：君の金庫だ。ほら、あれはクリューサルスだ。

という言葉に導かれて登場するや、クリューサルスは事の蹟きを知らずに、

Hunc hominem decet auro expendi, huic decet státuam statui ex auro;

... erum maiorem meum ut ego hodie lusi lepide, ut ludificatust!

callidum senem callidus dolis

compuli et pepuli mi omnia ut crederet.

nunc amanti ero filio senis,

... regias copias aureasque optuli,

... non mihi isti placent Palmenones, Syri,

qui duas aut tris minas auferunt.

(640, 642-45, 647, 649-50)

この俺という男の重みは黄金で量るのが似合い、この俺には黄金造りの立像を立てるのが似つかわしい・・・だって、大旦那を俺は今日まんまとだました、だまくらかしてやったんだから。旦那も頭が働くが、俺も策略に頭を働かせ、押す手を休めず、俺の話をもっと信用させた。それで年寄り旦那の

息子の若旦那の恋のために・・・王家の金庫いっぱいの黄金を調達した。俺は好きじゃないんだ、パルメノーやらシュルスなんていう2、3ミナぼっちしかふんだくらない連中は、

と自画自賛する。自分が「狡猾な奴隷」(callidus 643)であること、狡猾さの価値は「黄金」(auro, ex auro 640)に見合うこと、そして、奪う黄金が莫大(regias copias aureasque 647)である点でありきたりの奴隷とは異なることを示すせりふとなっている。メナンドロスがよく用い、『二度のだまし』でも使われるシュルスの名がありきたりの奴隷の代表として挙げられることも注目される。このあと、ムネーシロクスから、せっかくの策略の成功がふいになったことを聞き、再度の金の工面を求められると、クリューサルスは最初こそいい顔をしないが、すぐにやる気を奮い起こし、

quantum lubet me poscitate aurum: ego dabo.

quid mi refert Chrysaldo esse nomen, nisi factis proba?

sed nunc quantillum usust auri tibi, Mnesiloche? dic mihi. (703-05)

私に好きなだけの金子をご用命なさい。私が用立てます。クリューサルスの名折れじゃないですか、ここでやって見せなけりゃ。さあ、ムネーシロクス、金子の御用はいかほどか、言ってください。

と言って第2の策略に取りかかる。

以上、「狡猾な奴隷」としてのクリューサルスについて金の工面がその本領として強調されていることを見た。次にバッキス姉妹に目を向けてみよう。

3. 冒頭場面でのバッキス姉妹の企み

バッキス姉妹は作品の題名とされているにもかかわらず、伝存する断片も入れて劇冒頭のおそらく100行あまりと結末の90行足らずのあいだにしか舞台に姿を現すことはない。けれども、姉妹の役回りには顕著な特色がある。すなわち、冒頭ではピストクレールス、結末ではニーコプールスとピロクセヌスのそれぞれを相手に、企みを講じて男を手懐けることである。企みは「狡猾な奴隷」と相通じる役回りである一方、姉妹の企みの性質は、金の工面をするクリューサルスの策略のそれとは異なっている。そうした役回りの点での両者の対応、あるいは、対比が本稿の問題、つまり、クリューサルスでなくバッキス姉

妹が飾る結末やプラウトゥスによる『バッキス姉妹』への作品の題名変更と関連していると考えerことは妥当であろう。この観点から、本章では、姉妹の企みのうち冒頭でのピストクレールスのものについて検討する。

姉妹の企みの手段が色香であることはすでにピストクレールスのせりふと推定される断片 18「だって君なら誰が相手でも、きっと心を魅惑できるよ」(nam credo quouiis excantare cor potes)から窺える。現存テキストは姉妹が相談するところから始まっているが、その中で姉は自分がピストクレールス誘惑に当たるとしたうえで、誘惑の言葉につまった場合を冗談めかして想定し、

pol quoque metuo lusciniolae ne defuerit cantio. (38)

本当に私も怖いわ、小夜鳴き鶯の魅惑の歌声が出なくならないかって。

と言う。二つのせりふには姉妹の「魅惑」(excantare fr.18, cantio 38)する力を当然のものとしている響きがある。

この力によって姉妹が誘惑しようとするのに対して、はじめのうちピストクレールスは抵抗を示し、

quia, Bacchis, Bacchas metuo et bacchanal tuom. (53)

なぜって、バッキス、僕はバックス狂女たちと君の住むバックスの宿が怖いんだ。

と言う。企みの性質が名前に現われているのはクリューサルスの場合と共通する。バックスが暗示するのは酒宴と、そこでの男女の戯れであり、そのことはこのあとのピストクレールスの言葉(55-56, 68-72)にも示される。それらを彼が怖がるのは、

quia istaec lepida sunt memoratui:
eadem in usu atque ubi periculum facias aculeta sunt,
animum fodicant, bona destimulant, facta et famam sauciant. (62-64)

だって、そんなのがいい感じなのは話のうえだけだもの。同じことを実際に試してごらんよ。痛い目を見る。心に穴が開いて、身代はぼろぼろ、経歴も評判も傷ものになる。

penetrem me huius modi in palaestram, ubi damnis desudascitur?

ubi pro disco damnum capiam, pro cursura dedecus? (66-67)

僕がこんな体育場に身を投じると思うのか。損するために大汗かく場所、円盤の代わりに損を、走る代わりに不面目を蒙る場所なのに。

というように、道徳的、金銭的、社会的に自分にとってマイナスだと考えるからである。このうち注意したいのは金銭面の要素である。というのは、バックス姉妹の企みは若者に散財させることに関わり、若者に金を工面するクリューサルス戦略と対をなしているように見えるからである。この点で、引用のせりふに Barsby は儉約を美質とするローマ的な考え方の反映を見ているのが、それが正しいとすれば、金銭的に散財と工面という姉妹と奴隷それぞれの場合の対比もプラウトゥスの意図的なものである可能性がある。

実際、「散財」のモチーフはこのあともバックス姉がピストクレールスを説得するあいだに、

BA. malacissandus es.

equidem tibi do hanc operam. PI. ah, nimium pretiosa es operaria. (73-74)

姉：身も心も柔らかくしないと。私を手伝ってあげる。

ピ：いや、高くつきすぎるよ、そんなお手伝いはね。

PI. rapidus fluius est hic, non hac temere transiri potest.

BA. atque ecator apud hunc fluium aliquid perdundumst tibi. (85-86)

ピ：きつい流れだ、この川は。ここを軽々しくは渡れない。

姉：そうよ、この川ではそれなりのものを水の泡にしないといけないの。

というように現われ、ピストクレールスが誘惑に屈したとき、

BA. quid est quod metuas? PI. nihil est, nugae. mulier, tibi me emancupo:

tuos sum, tibi dedo operam. BA. lepidus. nunc ego te facere hoc uolo.

quia ego sorori meae cenam hodie dare uolo uaticam:

eo tibi argentum iubebo iam intus efferri foras;

tu facito opsonatum nobis sit opulentum opsonium.

PI. ego opsonabo, nam id flagitium meum sit, mea te gratia

et operam dare mi ét ad eam operam facere sumptum de tuo.

BA. at ego nolo dare te quicquam. PI. sine. BA. sino equidem, si lubet.

propera, amabo. PI. prius hic adero quam te amare desinam.

(92-100)

姉：何が怖いことあるの？

ピ：なにもない。なんでもないことさ。さあ、僕のこの身をご自由にお使いください。僕はあなたのもの。あなたのお手伝いをするよ。

姉：あなた、いい感じよ。では、こうしてもらえるかしら。つまり、私は今日、妹のために宴席を設けたいの。無事に帰ったお祝いよ。そのお金をあなたに渡します。いま家の者に言って出してきてもらいますから、それであなたに私たちのパーティのまかないをしてほしいの。豪華なご馳走をお願いするわ。

ピ：それは僕の懐でまかなうよ。だって、恥さらしなもの、君が僕のために手伝ってくれてるのに手伝いの代金を君に出させたら。

姉：でも、もらいたくないの、あなたからなににもね。ピ：いいから。姉：いいわ。いいようにして。急いでね、お願い。ピ：すぐ戻るよ、君への愛が尽きないようにね。

というように、この場と姉妹の企みの締めくくりをなす。散財を恐れていたピストクレールスが自分からご馳走の代金を出すと申し出るところに、それを引き出したバッキス姉の言葉巧みさ、企みの妙がよく表れている。

と同時にそこに認められるのは、この企みによってピストクレールスが別人に変わったかのような展開である。誘惑に屈する以前は優柔不断な性格の、喜劇に登場する典型的な若者と見えた彼がこれ以後は（すぐあとにも見るように）見違える行動力を示す。その変化の契機は上の引用、とりわけ、92-93行のせりふに提示されているように思われる。「怖がる」のが類型的な若者のつねとすると、ここでピストクレールスはそれを「なんでもないもの」(nugae)として捨て去る。そして、*tibi me emancupo* (92)と言う。このせりふの字句どおりの意味は「私は私自身をあなたの私権下に移す」であり、「僕はあなたのもの」(tuos sum 93)という次の言葉とともに彼がバッキス姉に奴隷のように仕える意志を表明している^⑧。つまり、ここにはピストクレールスについて役回りのうえで若者から奴隷への転換が告知されていると見なしうる^⑨。すでに見たように、クリューサルスには奴隷の役回りとして金の工面が強調されていた。その点で、ピストクレールス退場のあと、姉妹が交わす、

SO. piscatus meo quidem animo hic tibi hodie euenit bonus.

BA. meus ille quidemst. tibi nunc operam dabo de Mnesilocho, soror,
ut hic accipias potius aurum, quam hinc eas cum milite. (103-04)

妹：どうやら今日のあなたの漁は上々の出来だったようね。

姉：あの人はもうこっちのものだから、今度はムネーシロクスのことであなたを手伝うわ。それで、あなたがここで金子を手に入れて、ここから軍人と出ていかないようにするの。

というせりふによって、ピストクレールスを釣り上げて自分たちの奴隷のように働かせようとする姉妹の目的が金の工面にあることがあらためて明示されていることに注意すべきであろう。

さらに、のちの場面、ピストクレールスによって姉妹の家に引き入れられた彼の教育係リュードゥスはそこでの乱痴気ぶりに耐えられずに飛び出し、

Bacchides non Bacchides, sed Bacchae sunt acerrumae.

apage istas a me sorores, quae hominum sorbent sanguinem. (372-73)

こいつらバックスという名だが、バックスじゃない。手に負えないバックス狂女だ。俺の前からさっさと消えろ、人の血を吸う姉妹め。

と叫ぶ。上述のように、ピストクレールスもバックス姉に誘惑される前は同じように彼女らを「バックス狂女」と呼び、彼女らとその住まいを恐れていた(53)。ところが、いまや姉妹の家に腰を据え、「あなたは中であんなことをして私にもあなた自身にも恥じていない」(neque mei neque te tui intus puditumst factis quae facis 379)とリュードゥスに非難されるほどの変わりようである。

そこで、この見方が正しければ、このあとすぐバックス姉妹は退場すると結末場面まで登場しないが、そのあいだもピストクレールスが奴隷の役回りを演じることを通じて彼女らの企みは舞台にのせられていると考えることができるように思われる。この観点から、ピストクレールスの描かれ方を次に見てみよう。

4. 「狡猾な奴隷」を演じるピストクレールス

バックス姉妹が退場した直後の場では、指示どおりに調べた宴会用の品々を

運ぶ奴隷たちを引き連れて登場したピストクレールスを見つけて、彼の教育係の奴隷リュードゥスが諫める。ここでリュードゥスの警戒心は、

Iam dudum, Pistoclere, tacitus te sequor,
expectans quas tu res hoc ornatu geras. (109-10)

ピストクレールスよ、さっきから黙ってあとをついてきたのは、あなたがこんな大支度でどんなことをやろうというのかと思つてのことだ。

non hic placet mi ornatus. (125)

私が気に入らないのはこの大支度だ。

というように、贅沢な宴会の支度に向けられる。その点で、浪費散財を戒める態度は先の場面でバッキス姉に誘惑される前のピストクレールスと共通している。ところが、いまのピストクレールスはそんなことを意に介さない。

PI. nemo ergo tibi

haec apparuit: mihi paratum est quoi placet.

LY. etiam me aduersus exordire argutias?

qui si decem habeas linguas, mutum esse addecet.

PI. non omnis aetas, Lyde, ludo conuenit. (125-29)

ピ：だから、誰もおまえのために用意したわけじゃない。僕のためにそろえたんで、そりゃ気に入ってるさ。

リュ：私に逆らってまで小賢しい減らず口を開くのか。おまえに舌が10枚あっても、口をつぐんでるのが似合いなのに。

ピ：リュードゥスよ、学校だって年相応に行ってられなくなるんだ。

ここで注目されるのは、*exordire argutias*(127)という表現である。*exordior* と *argutiae* はそれぞれ「序言(*exordium*)を述べる」「巧みな言い回し」という意味で、ともに弁論の術語として用いられ¹⁰⁾、その点でまず観客の耳を捉えるせりふであったと思われる。そのうえで、*argutiae* が派生した形容詞 *argutus* は、ホラティウスに「頭の切れる遊女やダーウゥスが年寄りのクレメースを誑かし」(*arguta meretrix Davoque Chremeta eludente senem Sat. 1.10.40f.*)という詩句があるように、狡猾な奴隷の口八丁ぶりを示すのに適切な語彙であることが認められる。そして、そのような話し方を始めたことについてピストクレールス自身

が「年相応」と応じていることは興味深い。いまやリュードゥスに説教される「若者」を卒業したかのような口ぶりに聞こえる⁽¹¹⁾。ここでは、ピストクレールスが狡猾な奴隷のように口舌を揮い始めていることが示されているように思われる。

実際、これに続いて二人のやりとりが、

LY. iam perdidisti té atque mé atque operam meam,
qui tibi nequiquam saepe monstraui bene.

PI. ibidem égo meam operam perdidí, ubi tu tuam:

tua disciplina nec mihi prodest nec tibi. (132-35)

リュ：いまや、あなたのおかげで水の泡だ、あなた自身も私も私の努力も。私があなたに繰り返し言い聞かせた立派な教えは無益だったんだ。

ピ：僕だって僕の努力を水の泡にしたさ。それはおまえの場合と同じだ。おまえのしつけは僕にもおまえにも役に立たないんだから。

というように交わされるとき、バッキス姉に誘惑される以前のピストクレールスがほぼリュードゥスのしつけ(*disciplina* 135)どおりに育った若者であったこと、そして、その状況がいま一変したこと⁽¹²⁾が了解される。リュードゥスはなおまだ諫言を続けるが、ピストクレールスは一向に顧みない。ついには、

LY. occisus hic homo est. ecquid in mentem est tibi
patrem tibi esse? PI. tibi ego an tu mihi seruos es?

(161-62)

リュ：この男はもう死んでるぞ。少しは考えないのか。父親がいる身だろう。

ピ：僕がおまえの奴隷なのか。それとも、おまえが僕の奴隷か。

となったところで、リュードゥスもお手上げになる。リュードゥスがピストクレールスに「父親がいる」こと(*patrem tibi esse* 162)、つまり、彼が若者としてなすべき役割を思い出させようとしたのに対し、ピストクレールスは、彼とリュードゥスのどちらがどちらの奴隷か、という問いで切り返す。この切り返しには、その前提として、ピストクレールスはいまバッキス姉の奴隷として仕えている、という認識があると考えると皮肉な含意がより明瞭になる。ピストクレールスは先に見たように、自分をバッキス姉の私権下に移すと表明していた(*tibi me emancupo* 92)。リュードゥスのせりふはそれをまた父親の私権下に戻そ

うとする譴責のように聞こえ、ピストクレールスはそれに対して、自分はバッキス姉の奴隷を演じているかもしれないが、リュードゥスの奴隷にはならない、逆に、リュードゥスが自分の奴隷だ、と応じていると理解できるように思われるのである。

そこで、ここでの二人のやりとりは、狡猾な奴隷の役回りに手を染めたピストクレールスをリュードゥスが類型的な若者に引き戻そうとして⁽¹³⁾逆にやり込められる次第を示すことで、バッキス姉妹の企みによって引き起こされた役回りの転換を舞台上で実際に演じてみせたものであると考えられる。

このピストクレールスの役回りの転換は次の場面で、言ってみれば、本物の狡猾な奴隷であるクリューサルスと相対したところでも演じられる。

CH. *eho, an inuenisti Bacchidem? PI. Samiam quidem.*

CH. *uide quaeso ne quis tractet illam indiligens;*

scis tu ut confringi uas cito Samium solet.

PI. *iamne ut soles?*

(200-03)

ク：うお、バッキスを見つけたってことですか。ピ：サモスの娘ならな。

ク：気をつけてくださいよ、誰もあの娘に不注意な扱いをしないように。ご存知でしょうけど、サモスの瓶はいつもすぐに壊れるんですから。

ピ：おまえはさっそくいつもの調子だな。

狡猾な奴隷らしく軽口を叩くクリューサルスが「いつもの調子」(ut soles 203)と言われるのに対し、バッキス妹を見つけたことを自慢して話すピストクレールスの様子は違っている。

CH. *ecquidnam meminit Mnesilochi? PI. rogas?*

immo unice unum plurumi pendit. CH. papae!

PI. *immo ut eam credis? misera amans desiderat.*

CH. *scitum istuc. PI. immo, Chrysale, em non tantulum umquam intermittit tempus quin eum nominet.*

CH. *tanto hercle melior. PI. immo- CH. ímmo hercle abiero*

potius. PI. num inuitus rem bene gestam audis eri?

CH. *non res, sed actor mihi cor odio sauciat.*

etiam Epidicum, quam ego fabulam aequae ac me ipsum amo,

nullam aequè inuitus specto, si agit Pello. (206-15)

ク：それで、彼女はムネーシロクスを忘れてないですか。

ピ：よく聞かぬ。忘れてないどころか、一途にこの人だけが大事と思ってる。

ク：なんとまあ。ピ：それどころか、どう思う、気の毒なほどの恋い焦がれようだ。

ク：それは上出来。ピ：それどころか、クリューサルスよ、いいか、ほんのわずかの間も置かずにあいつの名前を呼ぶんだ。

ク：まったく、さらにぐんといいですね。ピ：それどころか— ク：それどころか、まったくもうこれで失礼しますよ。

ピ：まさか嫌じゃないだろうな、主人の手柄話を聞くのが。

ク：話じゃなくて、役者が憎らしくて気に障るんです。『エビディクス』だって、私も我が身が可愛いと同じくらいに好きですけど、ペッリオーが演じるなら、これほど観るのが嫌な芝居はないんです。

と、あたかもクリューサルスの問いかけや反応が不適切ないし不十分であるかのように、いちいち「それどころか」(immo 207, 208, 209, 211)と応じて気を悪くさせ、反撃を食らうことになる。言及されるペッリオーがプラウトゥス作品の上演も手がけた高名な役者兼座長であることには古代の証言がある⁽¹⁴⁾。そこから生じる問題、たとえば、ここでペッリオーがピストクレールスカクリューサルスを演じていたかといったこと⁽¹⁵⁾には立ち入らない。が、クリューサルスが憎らしくて気に障ると言う「役者」(actor 213)がピストクレールスを指すこと、『エビディクス』は『パッキス姉妹』などと同じく狡猾な奴隷エビディクスの策略が劇の中心をなす作品であること、その作品をペッリオーが「演じる」(agit 215)と言われる場合、それはエビディクス役であると理解するのが自然であること、これらのことは確かである。そして、ペッリオーが演じる芝居を見るのが「嫌」(inuitus 215)と言われるのは、主人の手柄話を聞くのが「嫌」(inuitus 212)か、というピストクレールスの問いを受けてのことであるのも間違いないであろう。とすると、ここでのピストクレールスの役者ぶりは高名な役者による狡猾な奴隷の演じぶりにたとえられていることになる。その役者ぶりをクリューサルスが「憎らしくて気に障る」(mihi cor odio sauciat 213)と言うのは、彼自身が本来の狡猾な奴隷である、という自負に発すると考えると理解できるように思われる。ピストクレールスがいくらうまく狡猾な奴隷を演じようとしても、「本物」には勝てない、主役はやはり俺だ、という宣言がなされているように

考えられるのである。実際、「主人の成功話」(rem bene gestam eri 212)を遮られたピストクレールスはクリューサルスの指示を受け、「やるよ、おまえの言うとおりに」(faciam ut iubes 228)というせりふとともに退場する。主導権と活躍の場をクリューサルスに譲り、以後は、言ってみれば、クリューサルスの手下の役割を担うことになるのである。

ただ、手下とはいえ、それなりの働きはこのあとも何度か認められる。その一つは、軍人クレオマックスの使いとしてやってきた食客を追い返す場面である(573-611)。ここでピストクレールスは切れのいい啖呵をたたみかけ、そこには類型的な若者の優柔不断さは少しも見られない。また、続く場面でも、自分の失敗にしょげ返るムネーシロクスとは対照的に、彼を激励し、前向きな態度を示す(612-39)。加えて、クリューサルスが第2の策略のための道具としてムネーシロクスに手紙を書かせるときには、ピストクレールスが書板など必要なものを用意し(714-15, 726-27)、三人のあいだで、

MN. quid scribam? CH. salutem tuo patri uerbis tuis.

PI. quid si potius morbum, mortem scribat? id erit rectius.

CH. ne interturba. (731-33)

ム：なんて書けばいい。ク：親父さんに息災を願う言葉ですよ。

ピ：それよりも病気お陀仏祈願を書いたらどうだ。そのほうが正直だ。

ク：茶々入れないでくださいな。

というやりとりが交わされる。ピストクレールスの軽口は、そのまま書けば策略をぶち壊しにするものだが、手紙を書くのはまさしく父親の「お陀仏」を意図しているから、気持ちを素直に書く点で、まさに「より正直」(rectius 732)と言える。いずれにも、狡猾な奴隷の特質の一つである軽妙な口達者ぶりが発揮されていることが認められよう。

5. 結末でのバッキス姉妹の企み

さて、バッキス姉妹の企みはピストクレールスを誘惑する冒頭場面のみならず、誘惑によって役回りを転換したピストクレールスの働きを通じて舞台上にのせられていることを上に見た。では、彼女らが登場する結末場面はどうか、以下にはまず、主に冒頭での誘惑と比べながら見ていくこととする。

姉妹が誘惑する相手は、冒頭場面ではピストクレールス一人であったが、結

末場面ではニーコプールスとピロクセヌスの父親二人になる。そのうちピロクセヌスは、姉妹が二人への対処を相談しているあいだに(1149-54)バッキス妹の色香にまいてしまう。

PH. nihili sum. NI. istuc iam pridem scio. sed qui nihili's? id memora.

PH. tactus sum uehementer uisco;

cor stimulo foditur.

(1157-59)

ピ：私はつまらない人間だ。ニ：そんなこと、ずっと前から知ってますが、どうしてつまらないのか、それを言ってくださいよ。

ピ：私は捕まったんですよ、強力な鳥もちでね。心臓が突き棒で穴を開けられてるんです。

鳥もちと心に穴が開くモチーフは冒頭でも使われていたが、それはピストクレールスが姉妹の誘惑を恐れている段階で、

PI. Viscus merus vostrast blanditia. BA. Quid iam? PI. Quia enim intellego, duae unum éxpetitis palumbem, perí, harundo alas verberat.(50-51)

ピ：まさに鳥もちだ、君らの誘い文句は。姉：また、どうして。ピ：だって、分かってるよ、君ら二人がかりでただ一羽の鳩を追っかけてることは。あ、まずい、鳥もち竿で翼を打たれてるよ。

quia istaec ...

animum fodicant, bona destimulant, facta et famam sauciant.

(62, 64)

だって、そんなので・・・心に穴が開いて、身代はぼろぼろ、経歴も評判も傷ものになる。

というように姉妹への警戒心を表わすのに使われていた。ピロクセヌスにはそうした固さを解きほぐす必要すらない。なにもしなくとも彼女らの言うなりになるのであり、彼自身が「私はつまらない人間」(nihili sum 1157)、字義どおりには「私は無価値」と言うせりふは暗にその点を突いているように聞こえる。

恋していると言って憚らず、息子も赦してしまうピロクセヌス(1162-65)に対してニーコプールスは姉妹との対決姿勢を緩めない。相談を終えて目の前へ来た姉妹を彼は「醜聞に誘い込んで、言いくるめる女たち」(probriperlecebrae et persuastrices 1166)と呼び、彼女らの武器が色香による誘惑であることを把握し

ている。このせりふは冒頭場面でピストクレールスが姉妹の誘う宴席について「これほどに人をたらし込むものはありえない」(istoc inlecebrosius fieri nil potest 87)と言っていたことを想起させる。

それに続けて彼は息子二人とクリューサルスを返すよう強い調子で求める。が、その矛先は徐々に鈍ってくる。最初の兆候は、

NI. malum tibi magnum dabo iam. BA. patiar, non metuo ne quid mihi doleat
quod ferias. NI. ut blandiloquast ! ei mihi, metuo. (1173-74)

ニ：お仕置きをたっぷり食らわずぞ、もう。姉：かまいません。怖くありませんわ。痛いはずないですもの、あなたがぶつなら。

ニ：うまくすかすわい。こりゃあ、手ごわいぞ。

というやりとりに現れる。このあと少しはまだ姿勢を崩さないが、取られた金を半分返すから家の中に入って赦してくれるようにというバッキス姉の提案(1184)にピロクセヌスの口添えが加わると、まず酒を飲むことについて「ええい、じゃあ、どうとでもなれ、不面目でもかまわん、そうすることにしよう」(age iam, id ut ut est, etsi est dedecori, patiar, facere inducam animum 1191)と言って承知してしまう。さっきはバッキス姉がお仕置きも「かまいません」(patiar 1172)と受けにまわっていたのに、いまはニーコプールのほうが不面目も「かまわん」(patiar 1192)と、立場が逆転している。すると、あとはなしくずしになる。

NI. caput prurit, perii, uix negito.

...

NI. quid ago? PH. quid agas? rogitas etiam? NI. lubet et metuo. BA. quid metuis?

NI. ne obnoxii' filio sim et seruo. BA. mel meum, amabo, istaec fiunt.

tuost: unde illum sumere censes, nisi quod tute illi déderis?

hanc ueniam illis sine te exorem. NI. ut terebrat! satin offirumatum

quod mihi erat, id me exorat?

tua sum opera et propter té improbior. (1193, 1196-1201)

ニ：頭がかゆい。もうだめだ。もう否とは言い張れない。・・・

ニ：どうしよう。ピ：どうしようって、まだ決まらないのか。

ニ：やりたい。それでいて怖いんだ。姉：何が怖いのか。

ニ：わしが息子と奴隷にかしづくことだ。

姉：まあ、かわいい人ね。そういうことになっても、息子さんはあなたのもの。他の誰からもらえると思います？ あなた自身があげるしかありません。どうか息子さんたちを赦してあげて。私の願いを聞き入れてくださいな。

ニ：錐で穴を開けられる気分だ。断固拒否のつもりだったのに、聞き入れねばならんのか。あんたの仕業、あんたのおかげでわしは品性を落とすのか。

いまやニーコプルスは「錐で穴を開けられ」(terebrat 1199)、ピストクレールスやピロクセヌスが心に穴を開けられた(64, 1159)のと同じ状況に陥った。

ここでは「息子と奴隷にかしづく」(obnoxius filio et seruo 1197)ことをまだ「怖がっている」(metuo 1196)だけの段階だが、最後には、

BA. filii uos expectant intus. NI. quam quidem actutum emoriamur.

SO. uesper hic est, sequimini. NI. ducite nos quo lubet tamquam quidem addictos.

BA. lepide ipsi hi sunt capti, suis qui filiis fecere insidias. (1204-06)

姉：息子さんたちがあなた方を中で待ってますよ。ニ：さぞかし、わしらがとととご臨終にならないかってだろ。

妹：もう日暮れですから、こちらへどうぞ。ニ：連れてってくれ、どこへなりと。わしらはさぞかし破産奴隷みたいなもんだ。

姉：この人たちは息子を待ち伏せしようとして自分がまんまと捕まりました。

というところで幕になる。

冒頭場面でピストクレールスがバッキス姉の誘惑に絡め取られたときに「僕はこの身をご自由にお使いください」(tibi me emancupo 92)と言ったのと同じように、ここでニーコプルスは姉妹の奴隷であることを認めている。そこに至るまでに誘惑を「怖がる」(metuo 53, 55, 78; 1174, 1196)のも共通している。加えて、上に見たように、ニーコプルスに宛てた策略の手紙にピストクレールスはお陀仏を願う旨を書けばどうかと軽口を叩いていた(732)が、結末はこれに見合うものと言えるかもしれない。

さて、以上に見るかぎりでも、結末場面が冒頭場面と対応していることは明らかに思われる。そのうえで、姉妹の企みには二点の特色が指摘できる。その第一は、姉妹が本心を偽ってわざと下手に出ると相手がそれにほだされるように姉妹の思うつぼにはまるという展開であり、第二は、企みによって捕らわれた相手が奴隷になるという結果である。

第一点について冒頭場面を振り返ってみよう。ピストクレールスが誘惑に屈したあと、バッキス姉からお金を渡すので妹のためのパーティのまかないを頼むと言われて、自分がその金を出すと応じたところは上にも触れた。

PI. ego opsonábo, nam id flagitium meum sit, mea te gratia
et operam dare mi ét ad eam operam facere sumptum de tuo.

BA. at ego nolo dare te quicquam. PI. sine. BA. sino equidem, si lubet.

propera, amabo. PI. prius hic adero quam te amare desinam. (97-100)

ピ：それは僕の懐でまかなうよ。だって、恥さらしなもの、君が僕のために手伝ってくれてるのに手伝いの代金を君に出させたら。

姉：でも、もらいたくないの、あなたからなにもね。ピ：いいから。

姉：いいわ。いいようにして。急いでね、お願い。ピ：すぐ戻るよ、君への愛が尽きないようにね。

という具合であったが、これ以前にも、誘惑の過程で、

BA. ill' quidem hanc abducat; tu nullus adfueris, si non lubet.

PI. sumne autem nihili, qui nequeam ingenio moderari meo? (90-91)

姉：あの軍人がこの娘を連れ去るでしょうけど、あなたはついててくれなくていいわ。そうしたくないでしょうから。

ピ：僕ってやつはつまらない人間か。自分の気持ちを抑えられないんだから。

というやりとりがあり、ピストクレールスの心が揺らいでいた。

結末場面でも、お仕置きを食らわず、と脅すニーコプールスにバッキス姉が、ぶたれてかまわない、と応じ、相手に「うまくすかずわい」(ut blandiloquast ! 1174)と感心させたところは上に見た。また、ニーコプールスが対決姿勢を緩めるきっかけはバッキス姉が「どうかしら、いっそ金子の半分を返せば、私と一緒にこっちへ入ってくださる？」(quid tandem si dimidium auri redditur, in' hac mecum intro? 1184-85)と問いかけたことであつたが、金を返すというのが本気かどうかあやしい。というのは、最後にニーコプールスは自身を「破産奴隷みたいなもの」(tamquam quidem addictos 1205)と言っていたからである。「破産奴隷とは、借金の清算が済むまで奴隷奉公することを法律が定める者」(addictus, quem lex seruire donec soluerit iubet: Quint. Inst. 7.3.26)である。あとに詳しく見るように、

結末場面でニーコプールスは持ち物すべてをだまし取られたように言われている⁽¹⁶⁾が、それならば、奉公という形でさらに搾取しよう、というのが「破産奴隷」の含意であろうと考えられる。

ただ、先走る前に、特色の第二点に目を向けておこう。冒頭でのピストクレールスも結末でのニーコプールスも自分を姉妹の奴隷とする点は共通する。と同時に、そこには対照の妙も認められる。ピストクレールスの場合には、典型的な若者から狡猾な奴隷へと役回りを転換する面が見られた。それによって「本物の」狡猾な奴隷クリューサルスが金をだまし取る策略の手助けをした。それに対して、ニーコプールスの場合、金をだまし取られた結果、バッキス姉妹の誘惑にあつて「厳格な父親」から「恋する老人」へ役回りを転換し、それによって「破産奴隷」となっている。

上には、バッキス姉妹による企みの二つの特色が冒頭と結末で関連した展開を示していることを見た。では、クリューサルスの策略との関係ではどうであろうか。次には、この点を検討する。

6. バッキス姉妹の企みとクリューサルスの策略の対応と対比

姉妹による企みの第一の特色として、わざと下手に出て相手に自分からこちらの意中にはまるよう仕向ける、ということを上述べた。そのように相手の心理を利用するやり方はクリューサルスの策略にも見ることができる。

最初の策略が水泡に帰し、あらたに策略を頼まれたとき、はじめ嫌な顔を見せたクリューサルスは次のやりとりの間に思い直す。

CH. quid dixit? MN. si tu illum solem sibi solem esse diceres,
se illum lunam credere esse et noctem qui nunc est dies.

CH. emungam hercle hominem probe hodie, ne id neququam dixeris. (699-701)

ク：親父さんは何と言いました？

ム：「もしクリューサルスがあのだ陽が太陽だとわしに言ったとしたら、わしはそれが月だと信じる。夜なんだよ、お日様が出ててもな」ってさ。

ク：絶対、今日あの人をきれいに丸めてやりますよ。言ったことを無駄にはさせません。

ニーコプールスが自分を信用していないことを逆にとろうというのである。その方策として彼はまず、ムネーシロクスに書かせるニーコプールス宛の手紙

に、彼が金を奪って遊興に使わせようとしているから、だまされるな、という注意を入れさせる(739-44)⁽¹⁷⁾。込められた意図は、

nunc truculento mi atque saeuo usus senest;
nam non conducit huic sycophantiae
senem tranquillum esse ubi me aspexerit.
uersabo ego illum hodie, si uiuo, probe. (763-66)

いまの俺には手荒く、容赦のない年寄りが必要だ。このペテンには都合がよくないのさ、年寄りが俺を見つけたときに平静でいられたらね。あいつに目を回させてやるよ。

という彼の独言が示すように、ニーコプールスを怒らせることである。そして、目論見どおりにニーコプールスはクリューサルスを縛り上げる。ところが、家の中で息子とバッキス妹と一緒にいる様子を見せられ(836-39)、そこへ憤慨した軍人クレオマクスが登場し、この二人を殺すと息巻く(860)のを聞くに及んで、恐れおののいた(pertimui miser 862)彼は和解金交渉をクリューサルスに委ねる(866-71)。和解が成立すると、ムネーシロクスを叱りに家の中へ入る、というクリューサルスの言葉を真に受けて、存分に説教するよう頼んだうえ、

lippi illic oculi seruos est simillimus:
si non est, nolis esse neque desideres;
si est, abstinere quin attingas non queas.
nam ni illic hodie forte fortuna hic foret,
miles Mnesilochum cum uxore opprimeret sua
atque obruncaret moechum manifestarium. (913-18)

あの奴隷はただれ目そのものだ。いなければ、いないほうがいいし、いてくれたらいいと思うこともないが、いれば、手を借りずにいられない。実際、今日あいつがここにいたのは運がよかった。そうでなければ、軍人が連れ合いと一緒にムネーシロクスを取り押さえ、姦通の現行犯で斬り殺していた。

と独言する。はじめに彼はクリューサルスに怒るように仕向けられたのに、最後にはその存在を感謝する結果になってしまった。この皮肉な成り行きの要因、つまり、策略成功のポイントは、ニーコプールスの次のせりふに示される。

numquam edepol quicquam temere credam Chrysalo;

uerum lubet etiam mi has perlegere denuo:

aequomst tabellis consignatis credere.

(922-24)

クリューサルスをちょっとでも軽々しく信用するなど絶対にしないぞ。だが、この手紙をもういっぺん読み通してみよう。封印した書板は信用して大丈夫だからな。

彼は警戒心がクリューサルスに向くあまり、手紙こそがクリューサルスの策略の道具であることに思い及ばない。ここには、一つに集中すると他への備えが散漫になる心の動きのつねが捉えられている。

また、バッキス妹との手切れ金と称してさらにピリップス金貨 200 枚を無心するムネーシロクスの手紙をニーコプールスに渡して読ませる際にも、クリューサルスは本心を偽るせりふでニーコプールスの心に隙を作る。

ニーコプールスから、読むあいだ、そばにいろと言われれば、いたくない、聞けと言われれば、聞きたくないと答える(988f, 992f.)のに始まり、

non dabi', si sapies; uerum si das maxume,

ne ille alium gerulum quaerat, si sapiet, sibi:

nam ego non laturus sum, si iubeas maxume.

sat sic suspectus sum, cum careo noxia.

(1001-04)

渡さないことです。それが賢明だ。でも、どうしても渡すというなら、息子さんに他の運び役を見つけさせてください。それが賢明です。私は運びませんよ。どうしてもってあなたが言ってもだめです。もうさんざん疑われたんですからね、罪もないのに。

と、とぼけてみせ、さかんにムネーシロクス非難の合いの手(1006, 1012, 1018)を入れながら、「絶対に一枚たりともだめです。それが賢明です」(ne unum quidem hercle, si sapis 1027)と訴えてみせる。

手紙を読み終わったとき、ニーコプールスはクリューサルスの意見を求める(1035)が、それは前の場面の最後に、絶対に軽々しく彼を信用しない、と言っていた(922)のとは明らかに異なる心理状態を示している。ここにいたって、

nihil ego tibi hodie consili quicquam dabo,
neque ego haud committam ut, si quid peccatum siet,
fecisse dicas de mea sententia.
uerum, ut ego opinor, si ego in istoc sim loco,
dem potius aurum quam illum corrumpi sinam.
duae condiciones sunt: utram tu accipias uide:
uel ut aurum perdas uel ut amator peieret.
ego neque te iubeo neque uoto, neque suadeo. (1036-43)

私は今日あなたに決して何一つ具申いたしません。迂闊なことはしないんです。もしなにか躓きがあったとき、私の意見を入れてしたことだとあなたに言われては困りますからね。でも、私の考えでは、もし私があなたの立場なら、金子を渡しますね。息子を墮落させるよりましですから。選択肢は二つです。どっちをお取りになるか考えてください。あなたが金子を失うか、息子さんが色恋で誓いに背くかです。私はしろとも、するなとも、してはどうかとも言いません。

というように、クリューサルスが助言はしないと予防線を張りつつ、その言葉と裏腹に、金を出すよう仕向けると、すぐにニーコプールスは情にほだされて息子に金を渡すことに決め、家の中へ取りにいつてしまう(1044, 1049-52)。そして、彼が金をもって戻ったとき、

NI. cape hoc tibi aurum, Chrysale, i, fer filio.
ego ad forum autem hinc ibo, ut soluam militi.
CH. non equidem accipiam. proin tu quaeras qui ferat.
nolo ego mihi credi. NI. cape vero, odiose facis.
CH. non equidem capiam. NI. at quaeso. CH. dico ut res se habet.
NI. morare. CH. nolo, inquam, aurum concredi mihi.
uel da aliquem qui seruet me. NI. ohe, odiose facis.
CH. cedo, si necesse est. NI. cura hoc. iam ego huc reuenero. (1059-66)

ニ：さあ、クリューサルス、この金子を取れ。息子に届けてくれ。わしは中央広場に行く。軍人への払いを済ますんだ。
ク：私は受け取りません。ですから、誰か届けてくれる人を見つけてください。私に預けるのはだめです。ニ：取れったら。憎らしいやつだ。

ク：私は受け取りません。ニ：お願いだ。ク：申し上げてるとおりにしかありません。ニ：手間のかかるやつだ。ク：だめって言ってるでしょ、金子を私の手に預けるのは。では、誰か私を見張る人をつけてください。

ニ：もう、憎らしいやつだ。ク：もらいますよ、そうしないといけないようですから。ニ：気をつけてな。わしもすぐに戻るから。

というやりとりが交わされ、クリューサルは金をせしめる。助言はしないと断ることで相手に自分の考えを聞かせるように、また、金を預けるなど言い張ることで預けることへの疑いを相手に抱かせないように仕向けており、それが成功の鍵をなしている。目を引くのは *nolo ego mihi credi*(1062) というせりふで、1064 行ではつきり口にされるように、文脈上は *aurum* を補って「私に(金子を)預けるのはだめ」と解するしかないが、そのせりふだけを見れば「私を信用してはだめ」という意味にとれる。ニーコプールはそう言われているのに、また、自分でもクリューサルを絶対に信用しないと書いていた(922)のに、彼の思うつぼにはまっている。

このように、相手の心理を利用するやり方はバッキス姉妹の企みの第一の特色と共通していることが認められるが、その第二の特色、つまり、企みにかかった相手が奴隷に見立てられることもクリューサルの策略には見られる。

クリューサルはニーコプールに対し、ムネーシロクスの最初の手紙を読ませ、思惑どおりに自分を縛り上げさせたときには、

o stulte, stulte, nescis nunc uenire te ;

atque in eopse astas lapide, ut praeco praedicat. (814-15)

ああ、愚かも愚か、あなたは分かってませんね、自分が売られているのを。あなたが立ってる石壇こそ、触れ役が競りの声を上げるところですよ。

と皮肉り、二通目の手紙を手渡す前には、

nunc Priamo nostro si est quis emptor, comptionalem senem

uendam ego, uenalem quem habeo, extemplo ubi oppidum expugnauero. (976-77)

さあ、われらがプリアモスに誰か買い手がつくなら、まとめ買い用の老いぼれ奴隷として売ることになろう。町を攻め落としたり、即刻にな。

と宣言する。

これらではいずれも「売られる」ないし「売り払われる」ことに譬えのポイントが置かれている。それが表現するのは、一つには、金をだまし取ったことであり、これはほとんど自明と言える。

と同時に、認められるのは、だまし取ったあとはもう用なし、というイメージである。とくに 976-77 行の場合、「まとめ買い用の老いぼれ奴隸」(comptionalem senem uenalem)とは、単品では価値が低く売り物になりにくい商品が多数まとめて叩き売りされるように、他の多くと抱き合わせで売られる年寄りの奴隸のこと⁽¹⁸⁾を言うので、この面がはっきり出ている。

このイメージはクリューサルスにとってよく適合する。というのも、彼はここで自分の策略の成功を自画自賛しているのです、そのためには万事がうまく完了した（したがって、だました相手にもう用がない）ことを強調したい気分だと考えられるからである。

とすると、同じように奴隸の見立てでも、クリューサルスとバッキス姉妹では使われ方に相違のあることが気づかれる。バッキス姉妹の場合、ピストクレールスはクリューサルスを手伝って狡猾な奴隸のように働き、二人の父親は「破産奴隸」として彼女らの家に入った。つまり、いずれもが彼女らの奴隸になり、彼女らのために奴隸奉公する、とされた。そして、その奴隸状態は劇の幕がおりたあとも続くと考えられる。それに対して、クリューサルスにとってニーコブールスは奴隸は奴隸でも用済みの、もはやお払い箱にするしかない役立たずのように言われている。

この点で興味深いのは、軍人クレオマクスに和解金としてピリップス金貨 200 枚をニーコブールスに支払わせる策略がうまく運んで、軍人にはもう用がなくなったとき、退場する軍人に向かってクリューサルスが「つまらんやつめ」(nihili homo 904)と悪態をつくことである。この表現は、すでに触れたように、ピストクレールスの場合(91)もピロクセヌスの場合(1157 bis, 1162)もバッキス姉妹の誘惑に絡め取られる状況について用いられ、さらに、すぐあとに見るように、納め口上でも同様の含意で父親二人について使われている(1207)。

ここでこれまでの検討を整理してみよう。クリューサルスの策略とバッキス姉妹の企みは、本当の狙いと裏腹なことを言って相手を自分の思う方向へ導くやり方、また、陥れられた相手が奴隸に見立てられる結果が共通する一方、クリューサルスが、陥れた相手にせよ、道具立ての人物にせよ、策略の目的である金の工面が達成されたときにその者たちを用済みとするのに対し、バッキス

姉妹の場合、陥れられた相手はそれによって「無価値」(nihilii)となるものの、そのことで逆説的に姉妹のために奉公する、という対比が見られた。

これらの対応と対比からは、クリューサルスの策略とバックシス姉妹の企みが密接な関連のもとに組み上げられていること、また、そこには「奴隷」をめぐるいくつかの意味合いが巧みに織り合わされていることが見てとれる。では、そうした劇作の中で、本稿が問題とした、終幕を前にしての狡猾な奴隷クリューサルスの退場はどのような機能をもつのか、そこでの凱旋による結末を月並みとする彼の観客へのせりふは、本稿の立てた見通しのよう、劇全体に関わる意味をもつのか。これを次に述べて結びとする。

7. 結び

この点でまず目を向けたいのは、

Hi senes nisi fuissent nihilii iam inde ab adolescentia,
non hodie hoc tantum flagitium facerent canis capitibus ;
neque adeo haec faceremus, ni antehac uidissemus fieri
ut apud lenones riuales filiis fierent patres. (1207-10)

この年寄り連中は本当につまらない人間で、それはもう若い頃からでした。だから、今日も白くなった頭でこんなたいへんな恥さらしをしでかしました。私たちがここまでのもをお見せしたのも、以前に見た経験があるからです、置屋のところで父親のくせに息子と張り合っている人たちをね。

という納め口上である。ここには、年寄り連中をつまらない人間、字義どおりには、価値のない人間(nihilii 1207)と言いながら、他方で、そうした人間が存在するためにこの劇が演じられた、つまり、この劇の成立に彼らは欠かせない価値を有した、と述べる逆説が認められる。

この逆説にはバックシス姉妹の企みと相通じる面がある。というのも、上に見たように、彼女らの誘惑に屈した相手も「つまらない人間」と言われたが、他方で、ピストクレールスの場合には、狡猾な奴隷の性格を帯びることで金の工面に努める。年寄りたちの場合には、破産奴隷という表現から推して、少なくとも、彼女らのために奴隷奉公に相当する働きをすることが考えられる、というように、それぞれの価値がそこに生じていたからである。

では、この点に関してクリューサルスの場合はどうだろうか。金が得られて

しまえば、策略を仕掛けた相手は彼にとって用済みで、もはやそこに価値は認められなかった。そのことは、上に見たように、彼の名前に端的に示されるとおり、彼の役割が金の工面にあるということから理解される。それこそが彼の存在理由であり、それと関わりのないことは彼にはどうでもいいことと見られる。象徴的なのは、「さっそく、この戦利品をそっくり財務官に届けに参りましょう」(nunc hanc praedam omnem iam ad quaestorem deferam 1075)というせりふを最後に彼が退場することである。あたかも、自分の役割を全うして、もはや舞台上にとどまる理由がないことを示すかのように聞こえる。

実際、このような姉妹とクリューサルスの対比は最終幕でも姉妹と年寄りたちのやりとりを通して演じられている。クリューサルスは最初の策略に取りかかるろうとするとき、「さあ、行くぞ。こいつを俺は今日この場で羊にする。プリクススの羊から黄金の毛を刈って生皮が見えるまでにしてやるんだ」(241-42)と言っていたが、そのとおりにされた二人の年寄りを見たとき、バッキス姉妹は彼らを「羊」(ouis 1121a, 1122)に見立て、「毛を刈り取られてるわ、二頭ともすっかりよ」(attonsae hae quidem ambae usque sunt 1125)、「絶対、今日あっちのは二回も刈られてる。間違いない」(pol hodie altera iam bis detonsa certo est 1128)と話す。そして、家の中へ入れようと言う姉に妹は、

hau scio quid eo opus sit,
quae nec lac nec lanam ullam habent. sic sine astent.
exsoluere quanti fuere, omni' fructus
iam illis decidit. (1133-36)

さあ、そんな必要あるかしら。だって、お乳も羊毛もないのよ。そのまま立たせときましょ。買値のつくところはすっかり吐き出してしまっ、実入りになるところなんてもうどこにもないんだから。

とまで言う。年寄りたちの価値(quantum fuere 1135)がクリューサルスの策略によってそれほど完全に失われたことがここに強調されている。

ところが、上の引用に続き、

SO: quin aetate crēdo esse mutas:
ne balant quidem, quom a pecu cetero apsunt.
stultae atque haud malae uidentur.

reurtamur intro, soror. NI: ilico ambae

manete: haec oues uolunt uos.

SO: prodigium hoc quidemst: humana nos uoce appellant oues.

NI: haec oues uobis malam rem magnam quam debent dabunt. (1138-42)

妹：そうよ，年のせいでしょうけど，声も出ないわ．鳴きもしないもの，他の羊から離れてるのに．とんまなのね．悪いことはしそうにないから．中へ戻りましょうよ，姉さん．

ニ：二人とも，そこを動かないでくれ．この羊たちがあんだ方に用がある．

妹：不思議なこともあるものね，羊のくせに人の声で私たちを呼ぶなんて．

ニ：この羊たちはあんだ方にずいぶんひどい目にあった借りがある．それを返そうというんだ．

というやりとりから状況が変化する．このあと，姉妹の企みがうまく運んで年寄り連中を最後には破産奴隷として家に引き入れた次第についてはすでに上に述べた．ニーコプールスは「ずいぶんひどい目にあった借り」(malam rem magnam quam debent 1142)をこの言葉の時点で考えていたのとはまったく異なる仕方で返す結果となったのである．その皮肉な展開もさることながら，ここで注意したいのは，年寄り羊が毛を刈り取られただけでなく，「声が出ない」(mutas 1138, ne balant quidem 1138a)と言われることである．mutus は舞台上でせりふのない登場人物を表わすのに用いられる⁽¹⁹⁾．この含意がここにあると考えると，バックス妹のせりふはよりよく理解できる．年寄りたちはますます価値を失っているが，価値を失わせたクリューサルはそれで役割を終え，すでに退場したあとである．であれば，年寄りたちはなおのこと舞台上で演じうるものを持ち合わせているはずがない．舞台の上に立ってはいても，役には立たない，そのことが「声が出ない」という表現に込められているように思われる．少し戻って，彼らを「そのまま立たせときましょう」(sic sine astent 1134)というせりふもこの含意に呼応していることが認められる．そして，彼らを相手に演じることがないなら，姉妹も退場するしかない．「中へ戻りましょう」(reurtamur intro 1140)というせりふはあたかもそのことを示すかのようである．しかし，まさにその瞬間にニーコプールスが「二人とも，そこを動かないでくれ」(ilico ambae manete 1140f.)という声を発した．これはじつに「不思議な出来事」(prodigium 1141)であり，決して「月並み」(peruulgatum 1073)ではない．バックス姉妹は「人の声で呼ばれている」(humana nos uoce appellant 1141)，つまり，それに応える

べきせりふをいま自分たちに向けられている。そこで、姉妹は舞台に留まった。かくして、引用したやりとりには、もう価値が失われたと思われた年寄りたちからあらたな芝居的一幕が仕立てられる成り行きが重ね合わせて表現されているように思われる。

ここで思い起こされるのは、『プセウドルス』での

quid nunc acturu's, postquam erili filio
largitu's dictis dapsilis? ubi sunt ea?
quói neque paratast gutta certi consili,
neque adeo argenti neque - nunc quid faciam scio.
neque exordiri primum unde occipias habes,
neque ad détexundam telam certos terminos.
sed quasi poeta, tabulas cum cepit sibi,
quaerit quod nusquamst gentium, reperit tamen,
facit illud ueri simile quod mendacium est,
nunc ego poeta fiam: uiginti minas,
quae nusquam nunc sunt gentium, inueniam tamen.

(395-405)

これからどうするんだ、若旦那に気前よく豪勢な口約束をしてしまって。そんな約束を果たせる保証がどこにあるんだ。俺には雀の涙ほどもないんだ、これって頼りになる考えだって金だって。いまどうすればいいかも分からない。織り始めをまずどこから取りかかるかの見当もつかなければ、織り終えた布の上げどころも決まっていない。作家というものは、ノートを手にとると、さがしてもこの世のどこにもないものでも、いつもきまって見つけ出し、嘘のことを本当らしく見せる。そんなふうには俺もいま作家になろう。20ミナの金はいまこの世のどこにもないが、俺は見つけてやる。

という主人公のせりふである。プセウドルスの場合、「いまこの世のどこにもないもの」(quod nusquamst gentium 401, quae nusquam nunc sunt gentium 405)は金の工面の方策であり、それを見つけないかぎり、どういう芝居をすべきか(quid nunc acturu's? 395)も分からないが、見つけるのが劇作家(poeta 401, 404)と言われている。

『バッキス姉妹』の場合、最終幕では金の工面が済んでおり、それゆえにクリューサルスもすでに退場しているのであるから、なお芝居を演じるために残

された織りしろこそ「いまこの世のどこにもないもの」であろう。バッキス姉妹の企みはそれを見つけ出した芝居と見なせるかもしれない。そして、それは凱旋という月並みを退けたことから始まったのである。

注

- (1) 本稿は藤井が主として高橋の指導のもとに京都大学大学院文学研究科に提出した修士学位論文（平成 18 年度）に高橋が改稿を加えたものである。論文審査には中務教授も加わり、有益な示唆と助言を提供した。藤井は修士課程修了後に学業から離れ、議論の不十分な面について補正の機会を得る見通しがないため、藤井の承諾のもとに論文構想の核を生かしながら高橋が全般にわたって論を組み直した。なお、原典の訳文は高橋による。
- (2) 引用テキストは基本的に Lindsay, W. M., *T. Macci Plauti Comoediae*. Oxford 1904 による。
- (3) Ritschl, F., *Parerga zu Plautus und Terenz*. Berlin 1845(repr. Amsterdam 1965), 423-27. Ritschl は前 190 年とするのに対し、Barsby, J., *Plautus, Bacchides*. Warminster 1991, 181 はこの言及を上演年代特定の根拠とすることに積極的であるものの、幅をもたせた推定をしている。
- (4) Fraenkel, E., *Plautine Elements in Plautus*. Oxford 2007, 162-65; cf. Slater, N. W. P., *Plautus in Performance: The Theatre of the Mind*. Princeton 1985, 112-13.
- (5) 高橋宏幸「プラウトゥス『プセウドルス』の策略と芝居」『西洋古典論集』13(1996), 11-48.
- (6) Barsby, op.cit.(n.4), 116.
- (7) Ibid., 101f.
- (8) Cf. ibid., 103-04: この表現を'striking statement'とし、「恋の隷従」のトポス、喜劇での役割および力関係の逆転、プラウトゥスでの法律用語の常用という三つを関連する観点として挙げる。
- (9) Slater, op.cit.(n.5), 96f.もこの場面にピストクレールスへの役回りの割当という機能を見て、それは「恋する若者」とするが、それでは、Slater 自身が記すように、単純にすぎよう。他方、役回りの転換という点でまた興味深いのはプラウトゥスによるピストクレールスという命名（『二度のだまし』ではモスコス）である：πίστος「信頼すべき、忠実な」+ κληρος「割当」。
- (10) *OLD*, s.v. exordior, 3c, argutiae, 1a.

- (11) なお、リュードゥスの名は『二度のだまし』での名前がそのまま使われているが、*ludus* との洒落は明らかにプラウトゥスによるものである。ここでリュードゥスはピストクレールスに若者としての規範を守るように説教するが、メナンドロスの原作から名前を変えないこともそうした保守性と合致しているようで興味深い。
- (12) この変化を示す「水の泡」(*perdidisti* 132, *perdidi* 134)が 86 行のボックス姉のせりふ(225 頁に引用)と呼応するように見える点にも注意。
- (13) 前注参照。
- (14) *Didascaliae in Stichum*, 5, *Symmachus Ep.* 10.2.1.
- (15) Cf. Barsby, *op.cit.*(n.4), 116f.
- (16) ただ実際には、エペススからの貸し金取り立てでピリップス金貨 1200 枚を手に入れ、そのうちの 400 枚をまきあげられたものの、自分が借金を返せない状況ではまったくない。あくまでイメージとして表現されている。
- (17) 自分がだまそうとしていることを知っている相手に向かって、なおさらに、だまされないように注意する、というモチーフは『プセウドルス』504-17(cf. 125-28)にも用いられている。
- (18) Cf. *Cic. Fam.* 7.29.1; Shackleton Bailley, D. R., *Cicero, Epistulae ad Familiares*. 2 vols. Cambridge 1977, ad loc.
- (19) *OLD*, s.v. *mutus*, 3c.